

行政文書を 開示しています

市は、市民の皆さんからの請求により、行政文書を開示しています。
行政文書の開示とは、市の職員が職務上作成・取得した文書や図面などを公表することで、「遠野市情報公開条例」に基づき行っているサービスです。
手続きの方法などについて、詳しい内容を紹介し、**問い合わせ 市総務課行政文書係**（☎2111内線212）



開示請求できる行政文書とは何？

市は、市の行う活動などについて、市民の皆さんに詳しく理解してもらうため「遠野市情報公開条例」に基づき、行政文書を開示しています。開示することができ行政文書は、市の職員が職務上作成し、または取得した▽文書▽図面▽電磁的記録の三つです。ただし、次のいずれかに該当する行政文書は、開示することができません。

- ①法令などにより開示することができないとされるもの
- ②特定の個人を識別することができるもの
- ③法人その他の団体または事業を営む個人の正当な利益を害するおそれがあるもの
- ④人の生命、身体、財産の保護、犯罪の予防など、公共の安全と秩序の維持に支障を及ぼすおそれがあるもの
- ⑤市、国などにおける審議、協議などに関するもので、率直な意見の交換や意思決定の中立性が損なわれるおそれがあるものや、住民の間に混乱を生じさせるおそれがあるもの。特定の者に不当な利益・不利益を及ぼすおそれがあるもの

⑥市、国などの行う事務または事業の適正な遂行に支障を及ぼすおそれがあるもの
また、誰でも容易に入手できる情報や一般的に閲覧できる情報、図書館などで管理している歴史的・文化的に貴重な資料は、開示請求の対象外となります。

◎行政文書の開示方法

①開示請求 「行政文書開示請求書」に必要事項を記入の上、市総務課行政文書係へ直接持ち込むか、郵送で申請してください。

②決定通知 開示できない内容が含まれていないかどうかを審査の上、請求書を受理した日から15日以内に「決定通知書」を送付します。

③情報開示 決定通知書で定められた日時・場所では、通知書を開示します。閲覧は無料ですが、コピーが必要な場合は、有料（実費相当）となります。

※異議申し立て ②の決定内容に不服がある場合は、通知書を受け取った日から60日以内に異議申し立てをすることができます。

季節性 インフルエンザ の予防接種を受けましょう

季節性インフルエンザの 予防接種費用を助成

市内では新型インフルエンザが流行し、その予防が叫ばれています。これからの時期「季節性インフルエンザ」への注意も必要です。インフルエンザはウイルス性の感染症で、短い期間に多くの人へ感染します。予防には、手洗い、うがい、十分な栄養摂取などが挙げられますが、予防接種も有効な手段の一つです。市は「季節性インフルエンザ」

ザ」の流行を未然に防ぐため、予防接種費用の一部を助成しています。

◆対象者 市内に住所をおく
①65歳以上の人
②心臓、腎臓、呼吸器に重い病気のある60歳以上の高齢者
③64歳の人
④の人は事前の確認が必要です

◆助成期間 10月15日～来年1月31日（実施期間は医療機関ごとに異なります。事前に確認の上、接種してください）

◆助成額 1,500円（助成は1回のみ）
◆接種場所 左表の指定医療機関

指定医療機関名	
あいずみ内科医院	☎2021
川上医院	☎2051
時田医院	☎2147
千葉医院	☎4039
新里医院	☎1155
守口医院	☎2170
中央診療所	☎2277
小友診療所	☎2260
附馬牛診療所	☎2221
菊池医院	☎3020
柏原医院	☎3016
鱒沢診療所	☎2273
県立遠野病院	☎2222
県立東和病院	☎0198④2211
織笠内科医院	☎0198④2515

◆申請方法 指定医療機関に備え付けている申請書（予診票の裏面）に必要事項を記入の上、接種した医療機関の窓口へ提出してください。なお、申請には印鑑が必要です

◆その他 「新型インフルエンザ」の予防接種は、この助成の対象外です

◆毎年予防接種を受け積極的に予防しましょう
インフルエンザウイルスはその年によって流行する型が異なります。毎年欠かさず予防接種を受け、インフルエンザの予防に努めましょう。

◆問い合わせ 市福祉課母子保健係（☎2511内線12）、宮守総合支所地域振興課保健福祉係（☎2111内線135）

市長ひとこと

おじいさんの掛け声

今年の「日本のふるさと遠野まつり」は、好天に恵まれたこともあり、大変な賑わいの中終了することができました。沿道には朝早くから今や遅しと待ち構える多くの市民らの活気がいっぱい。「市長さんも踊るのか？」など、祭りならではの会話も楽しむことができました。

『ゲゲゲの鬼太郎』の作者で有名な漫画家水木しげる先生とその奥さまも、昨年に続きお越しいただきました。来年は奥さまが書いた『ゲゲゲの女房』が、NHKの連続テレビ小説でドラマ化されるということで、取材班も見えておりました。

しし踊りが最高潮に達したときでした。座って見物していたおじいさんの手足が、拍子に合わせてリズムを取り始めました。「そりや、そりや…」とその掛け声は高くなり、額には汗が。食事の準備や着替えの手伝い、交通整理など、文字通り市民総参加のお祭り。市内はもちろん、全国にも遠野の元気が「そりや、そりや…」と響きわたったのではないのでしょうか。（本田敏秋）